

人文知がゆき渡るデジタル社会をつくる

ミュージアム・コモンズ 専任講師 本間 友

遡ること3年ほど前、2021年の春に「Keio Object Hub」(KOH)が動きはじめました。KOHは、学部やキャンパスを横断して、文化財や学術資料のデジタル・データや関連する研究・教育活動の情報を集約し発信するポータル・サイトです。日本ではKOHのようなシステムをデジタル・

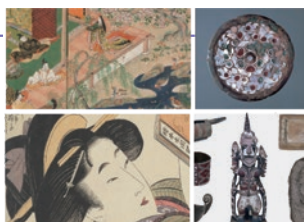
アーカイヴと呼びます。多様な文化的・学術的資料をデジタル化し公開するデジタル・アーカイヴは、現代社会における知の共有を担い、公平で包摂的な学びの基盤ともなるシステムであり、図書館・博物館・文書館そして大学など、さまざまな機関が構築に取り組んでいます。

慶應義塾は、日本のデジタル・アーカイヴが黎明期にあった頃から、人文科学とデジタル・メディアを結びつける研究と実践に取り組んできました。その先駆が1996年にスタートしたHUMIプロジェクトです。グーテンベルク聖書の高度なデジタル化を通じて、人文学情報の活用を図ることを目指したHUMIは、日本のデジタル・アーカイヴ史を語る上で欠かせない参照項となっています。その後も慶應義塾では、デジタル・アーカイヴ・リサーチセンター(DARC)、E I

RI(絵入り)プロジェクトなどのイニシアティブを通じて、人文知に関わる資料のデジタル化が進められるとともに、人文学報学に接続する研究・教育が展開されてきました。現在では一貫教育校も含め、文理を問わない多様な専門領域でデジタル・アーカイヴが構築されています。

専門人材やシステム・インフラの維持を必要とするデジタル・アーカイヴに継続的に取り組むことは、決して容易ではありません。慶應義塾は、HUMIから25年を超えて継続する活動と、それらの成果を発信するシステムであるKOHの公開を高く評価され、2023年に「デジタルアーカイブジャパン・アワード」を受賞しました。

KOHでは現在、歴史・民俗・美術・文学などの24コレクションにわたる、1万6500件超の資料を利用することができます。慶應義塾が蓄積する資料の全容からすれば、まだまだ公開されているのはごく一部です。これから、さまざまな研究者、そして塾員の皆さまのお力も借りて、KOHにより多くの資料を掲載し、慶應義塾の人文知をデジタル社会に共有してゆきたいと考えています。



KOHが公開する
さまざまなコレクション



KOHトップ画面



Keio Object Hub
<https://objecthub.keio.ac.jp/>

